

俳優 大内田 悠平さん

おおうちだ ゆうへい

1992年8月2日東京生まれ。専修大学附属高校卒、2016年専修大学経営学部卒。大学在学中のドラマ『私立バカレア高校』（2012年）でデビュー。ドラマ『ルーズヴェルト・ゲーム』（2014年）、映画『ビリギャル』（2015年）など出演多数。趣味はジョギング、映画鑑賞など。



生田キャンパス9号館2階会議室にて

演じて演じて演じまくりたい

専大出身の若手俳優。取材させていただきたいとオファーしたのは1年ほど前のこと。しかし、なかなか実現せぬまま時は過ぎ…。その間、映画『波乗りオフィスへようこそ』に出演したり、TVドラマ『世にも奇妙な物語』に出演したり、さらにはあのヒットドラマ『あなたの番です』の怖いストーリー内山役で世間の注目を集めたり——着々とキャリアを重ねたご様子。そしていよいよ実現しました。さあ、ご登場いただきましょう、大内田悠平さん！

——『あな番』での演技は、周りの反響も大きかったのでは。役作りはどのようにしたのですか。

間違いなく今までの出演作で一番反響がありました。「すごく気持ち悪い」「怖いんだけど」と周りから言われ、それが嬉しかったです。あの表情も仕草もディレクターさんとプロデューサーさんにヒントをいただき生まれました。僕が登場するのは2クールの後編からでしたので、待つ期間は長かったです。台本もなく、ストーリーで気持ち悪い役としか知らされてなくて、その間はどうか演じればいいのか不安でした。あえて家族や友人とも話さずに孤独な時期をつくったりしながら、まさに「あなたの番」を待っていました（笑）。

——最近、多くの作品に出演し、仕事も波に乗ってきたのではないですか。

『あな番』のおかげでその印象が強いのと思いますが、まだまだこれからだという危機感があります。この世界に入って7年。一つ一つの作品を大切に、今はとにかく演じて演じて演じまくりたい。いただいた役に全力でぶつかっていきたくです。

「愛されたい」が原点に

東京で生まれ育つ。2歳上の兄の影響で小学校から野球を始め、専修大学附属高校でも野球部に所属。根っからの野球少年が、突如、大学1年で俳優を志した。

——なぜ俳優になろうと思ったのですか。

自分に何も無いということに耐えられなかったんです。それまでは野球をする環境にずっといて、日々決められたことをするだけで時間が埋まりました。それが大学に入って、良くも悪くも自由。朝寝坊しようと思えばできるし、時間割もアルバイトも自由に決められる。受け身で生きてきた自分が何をしたいのかわからなくなって、それがつらくて、何か始めようという感じでした。

——それで、なぜ俳優を選んだのですか。

もともと協調性に欠けたようなところがあって、人間関係に悩んで思春期を過ごしていました。家族以外に自分を愛してくれる人なんかいないというか。僕にとって、多くの人に愛される象徴が俳優だったと思います。俳優になれば、みんなに愛してもらえるのかな

という憧れでこの世界に入りました。

—協調性がないとは、どのような子どもでしたか。

努力せずに目立とうとするタイプでした。小さい頃から列に並べない。集合写真も一人だけ飛び出している。高校の野球部では3年の最後の大会の一番で、これからグラウンド入るぞって時に、一人だけおにぎり食べてて、監督にすごく怒られました。めちゃくちゃ暑い日で、僕は食べないと持たないなと思ったのですが、さらに、ベンチの空いてる場所に腰掛けたら、そこが監督の席で…。みんなもこんな時に空気壊すなよって。自己主張が悪い方向に出ていましたね(笑)。

—野球始めたのはお兄さんの影響だそうですね。

兄は自分とは真逆のタイプです。野球もずっとレギュラーで、友達も多くて…憧れですね。でも、一番近くにいる、自分が全否定されたような気になる存在でもありました。自分は人間関係もうまくなく、野球でも結果を出せなかったんで、その全部がコンプレックスであり原動力です。俺はこんなもんじゃないぞと周りに認めさせたいし、誰かにわかってほしい。今もその思いはあります。でも、こういった考えのままだと人間としてすごく薄っぺらいし、いい芝居はできないとも思っていて、大人になりきれないジレンマがあります。

—親御さんにはどのように育てられましたか。

勉強に関しては両親とも放任。野球に関してはものすごく協力してくれました。父とは日頃から政治や社会情勢のことなどもよく話しますが、会話よりも背中を見て、影響を受けたことが大きいです。父は仕事で早朝に家を出ますが、必ずトイレを掃除してから出かけます。母は人のことを批評したり、悪く言ったりせず、愚痴も言いません。そういうことに気づいたのは二十歳過ぎてからですが、見習いたいと思っています。

俳優としての手応えと焦り

大学を卒業して1年後、転機となる作品に巡り合う。新潟市西蒲区役所と武蔵野美術大学の官学共同プロジェクトとして2017～2018年に制作された映像作品『ハモニカ太陽』。男女の出会いから別れまでの10年を、春夏秋冬の4編で描いた作品だった。

—『ハモニカ太陽』は初の主演作ですね。

四季折々の風景を織り交ぜた家族愛のドラマです。今まで生きてきた中でも、一番の達成感と楽しさを味わい、役者を一生続けたいと思いました。でも、最初は主役をやっているのに、作品に全然貢献できていないという不甲斐なさがありました。夏編を撮り終えたときに、ディレクターに「最高だった」と言われたのですが、その言葉も素直に受け取れず、悔しくて、とにかく自分を変えたかったのを憶えています。

秋編は夏編の10年後が舞台です。主人公はそれだけ歳を重ねているのだから、その風格をなんとか表現

→8月、ドラマ『あなたの番です』の撮影現場にて。内山役の表情で自撮り



したいと思いました。父親にしても周りの大人にしても、経験を積んできた大人って風格があるんですね。秋編の撮影に入るまでの短い時間だけでも、死ぬ思いで苦勞しなければいけないと考えました。

早朝からアルバイトして、家に帰ったらひたすら走って、その後本を読んだりして。そんな不器用な方法しかできないんですけど、でも、がむしゃらにやり続けた結果、それまで友達にも「大根役者」っていじられたり、事務所スタッフからも「演技の幅がない」と言われていたのが、初めてプラスの意見を言われて、いい反応を得ました。やるだけやれば何かは伝わるという経験でした。

—「愛されたい」と思って始めた俳優ですが、実際にやってきましたか。

愛される人って、実は愛するのが上手い人だということに気づきました。大衆の支持を受ける人は、周りが見えているし、周りのために頑張れる人だと思います。映画『あゝ、荒野』で同年代の菅田将暉君と共演して、ショックを受けました。あれだけの有名人なのに、すごく気さくで、作品が少しでも良くなるように立ち振る舞っていて、現場のみんなが彼のことを好きになりました。そういう生き方が演技にも出ると思います。

—将来の夢をお聞かせください。

役者という職業を通して社会の役に立ちたい…いろいろな言葉で取り繕うこともできるんですけど…実際は僕の人生の中で一番やりがいを感じられ、楽しくて、一番かっこいいと思っているのが役者ですから、今は自己実現の欲求で動いています。どんな役者になりたいかはまだなくて、それを見つけたくて今やっています。

この取材を依頼されたときも、卒業生として胸を張って言えることはないと思って、何回も断っちゃって、すみませんでした。正直に言うと、常に焦りがあります。友達と遊んでいても、こんなことしている場合じゃないと思えて、楽しめる瞬間が仕事以外にないです。早くもつと大人の考えができるようになりたいですね(笑)。

今はとにかく、映画やテレビ、舞台でも365日、芝居に触れていたい。体力も気力もある27歳。演技に本気で打ち込んでいく中で、自分に何ができるのか、そこで自分の強みも見えてくると思っています。

サイン色紙プレゼント 大内田悠平さんのサイン色紙をご希望のお名前を入れて、抽選で5名様にプレゼントします。巻末のアンケートはがきのチェック欄に印をつけてご応募ください。